



TITLE:

1938年3月の天象

AUTHOR(S):

---

CITATION:

1938年3月の天象. 天界 1938, 18(202): 32-31

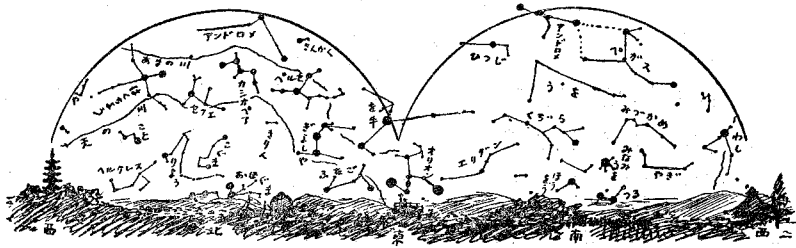
ISSUE DATE:

1938-01-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167593>

RIGHT:



## 1938年3月の天象

**星 座** 私達の頭上には、いま、淡い銀河が西よりに北から南へ走つてゐるが、それに沿つて輝く著しい星々のため、その存在は氣附かれ難い。實際、極く小さな條件によつても私達の眼界から消え去つてしまふほど、この銀河は弱々しいものである。

“カシオペア” “ペルセウス” から “おおいぬ” に至るまでの星の並びは幾度もくりかへして仰ぐ私達に飽きぬ興味を感じしめる。これらの星と星の群との上に遠い昔から積りつもつた傳説は、いつも私達の胸によみがへつて来る。このやうな美しい昔語りが、今までに、どれ程多くの人々に星への憧れを湧きたたせ、どれ程多くの観測者達の心を奮ひたせたことであらう。まこと、静かに凍つた闇の中から星を見上げる私達に、まづすぐに迫つて来るものは無限の意味を含んだあの瞬きである。

天の東半には “おほくま” と “しし” とが大きな姿をひろげてゐる。一つ一つではそれほどの意味もない星々ではあるが、それがこのやうに一つの繋がりととなると面白く見られるやうになる。一個の星としても、また星の群としても、何れに於ても興味深い西空の星々に比べて際だつた對照をなしてゐる。

**變光星** 蝕變光星 “アルゴル” は今月は11回の極小期をもつてゐるが、月光にも妨げられ、もう観測の時季も外れてしまつた。秋、東天にあらはれるまでの半年間は我々との交渉は絶たれる。

夜半をすぎると “てんびん” 座が東に昇り、その “デルタ” 星(アルゴル型蝕變光星)が懐しい姿を見せる。

**彗 星** “ゲール” 彗星(1927 VI) は、發表された豫報によれば、今春四月20

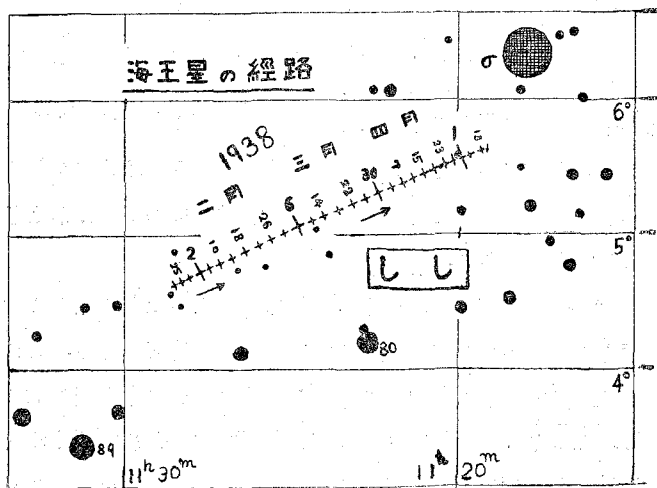
日頃に近日點を通るらしく、一月末に“蛇遣ひ”座の星の西方を、二月末に“いて”座の星の北方約1度を過ぎ、赤緯負20度の線に沿つて四月上旬には“やぎ”座の星に近づくものと思はれる。地球へ接近するのも四月中旬と豫想されてゐるが、光度は10級位であらう。

**流 星** 今月は著しいものは豫想されてをらぬ。

**海王星** “しし”座の星の南東を西北に逆行してゐる。11日に對衝となる。地球

に最も近く觀測の好期である。光度は7.7級、視半徑1.3秒。

**天王星** “ひつじ”座の星の東方を順行中。光度は6.2級で太陽に追いつかれ來月に



は全く見られなくなる。

**土 星** 春分點の東方を順行中で光度約1級。太陽に近くて見えぬ。

**木 星** “やぎ”座の星の北を順行中、太陽から次第に離れ曉に現れる。

**火 星** “うを”座より“ひつじ”座へ順行する。觀望に適せぬ。

**金 星** “みづがめ”座から“うを”座へぐんぐんと走り、宵の明星として甦へつて來た。光度は負3.4。

**水 星** 8日に太陽を追ひ越し(外合)“みづがめ”座から“うを”座に進み宵天に現はれ、月末から來月上旬にかけて觀望に適する。光りは負1級よりも明るい。また、20日頃には“うを”座の南部で金星、土星と會合して夕の西空にその美を競ふ。

**太 陽** “みづがめ”座より“うを”座に進み21日に春分點を通過する。春の恵みが漸く現れはじめて來た。(P)